

子供が消えゆく国

正方形の千代紙を二つに折り、それをまた二つに折っていくと、表面積はあつという間に四分の一になる。一九四七、四九年には二六〇万人以上であった出生数が、七一、七四年にいたつて二〇〇万人ほどになり、二〇一六年には一〇〇万人を下回り、一九九一年には九〇万人割れとなつた。要するに若者が子供を産んでくれないのである。五十歳時の未婚割合は「生涯未婚率」といわれる。一五年のこの値は男性二三%、女性は一四%を超えたという。この比率はなお上昇していくであろうと厚生省は予測する。

日本総研調査部の旧友・藤波匠君が『子供が消えゆく国』（日経プレミアシリーズ）を上梓、進呈してくれた。絶妙のタイトルではないか。どうして日本から子供が消えつつあるのか、もちろん要因を少数に絞り込めるほど単純な問題ではない。本書でも考えられる事由をすべて洗い出しているものの、出生率上昇への妙案が提示されるわけではない。低出生率の所以は、これをとことん追及してもなお「解」がみつからないほどに困難なテーマだということな

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

のであろう。しかし、藤波君は、適齢期の若者に社会の歪（ひずみ）を押し付けていること、ここに日本の最も深刻な問題のありようをみつめる、そういう視点において一貫しているように私にはみえる。

就職氷河期世代の晩婚化、結婚しても子供をもとうという志向性において薄いことなどを例に、社会の限られたパイの適正化を図ろうとしない日本の社会の歪んだありようを、藤波君は真摯（しんしん）にみつめる。

『次世代が、先を生きる世代よりも、少しずつでもいいから豊かになる』という、人間社会の発展過程における至極まっとうな国のあり方を提示する「ことができなければ、日本は衰弱していかざるを得ない、というのが藤波君の口吻である。

コロナ感染症の拡散により社会の縁辺部に生きる若者の雇用が次々と奪われていく姿をみて胸が痛む。平時であれば目に映ることのない現実が有事となればはつきりと顕現（けんげん）してくる。日本はこんなままで脆（もろ）い社会だったのか。みてみぬふりはこの辺りでよしにしなければなるまい。